西東京市市民協働推進センター

平成 27 年度第 1 回運営委員会会議録（確定稿）

■開催日時：平成 27 年 4 月 21 日(火)午後 7 時～9 時 7 分
■開催場所：イングビル 3 階第 1、2 会議室
■出席委員：池田委員、伊藤委員、小松委員、紺野委員、坂口委員、佐藤(文)委員、鈴木委員、田中(友)委員、田中(紀)委員、谷委員、富沢委員、中村委員　　＜以上 12 名、五十音順＞
■事務局　：内田センター長、佐藤副センター長、板垣、池田事務局長、丸木福祉活動推進課長、石井地域福祉推進係長、塚澤主事

○事務局長就任のあいさつ
○委員の委嘱
○自己紹介

1. 報　告　事　項

1. 業務報告について

事務局より、3 月期の主催事業、その他事業、ホームページアクセス数、新規登録団体、市民活動相談の状況について説明があった。

委員長：毎回ゆめこらぼ主催の事業と研修の報告をしている。職員が研修に参加した際の資料なども回覧している。

委　員：主催事業の避難所運営ゲーム（以下 HUG）の実施での、ゆめこらぼの役割となぜ避難所運営協議会と行っているのか知りたい。また今後の状況について教えてほしい。

事務局：NPO と地域コミュニティを繋げられないかと考え、HUG を繋ぐためのツールとして、実施には田無スマイル大学のご協力のもと、スタートした。次第に関心が高くなり市内で 20 回以上、各小中学校避難所運営協議会、小中学校 28 校の校長会の研修会、ふれあいのまちづくり住民懇談会の世話人会や住民懇談会でも実施している。

委員長：その他、主催事業に参加された方からの感想を聞かせてください。

委　員：まちづくり円卓会議に参加した。児童養護施設で会議を行ったことが素晴らしいと感じた。地域の中にある普段は行けない場所で開催できたことは、ゆめこらぼならではでないか。今後もこのような方向で進めていってほしい。一方、円卓会議は非常に難しいと感じた。児童養護施設で開催したため、そのことに議論がひっぱられたと思う。施設を見学したことで理解したような気になる現象が起こり、それが円卓会議メンバー間に少なからず影響があったのではないかと感じた。また、議論の方向がファシリテーターによってひっぱられていたと感じた。初回の議論では、地域コミュニティの中で考えていこうという意向があったが、二人のファシリテーターは子どもの専門家だった故に、子どもに焦点を置きすぎて初回の話し合いが飛んだ印象がある。次回より、ファシリテーターが替わると聞いたが、ファシリテーターの存在は大きいと思うので次回以降のファシリテーターがどのような方になるのかが、重要だと考える。ファシリテーターの変更に対して疑問を持っているが、今後の円卓会議には期待したい。

委員長：次回以降のファシリテーターは、八王子でスクールカウンセラーをされている方を予定している。

2．4月以降の事業について

事務局より、4月の実施事業であるひまわり事業、研修などについて説明があった。

委員長：「地域協議体」は西東京市の中で注目されている。テーマ別で活動している団体と地縁の地域コミュニティがどう連携するかということでは、ゆめこらぼが入る意義があると考える。

3．今年度の事業および予算について

事務局より、平成27年度西東京市市民協働推進センター事業計画書および活動計画書の説明があった。

委員長：事務局から事前に素案を出してもらい、それに対して意見をもらうように考えている。運営委員会がもう少し企画にコミットできるように、事務局には前倒しで説明してもらい、班単位で議論してもらいたい。予算については確定しているので省略する。

事務局：予算については、次回運営委員会で説明したい。

委　員：協働のまちづくりワークショップの目的は市職員と団体が交流するということだと思うが、成果目標が参加人数でよいのか。

委員長：成果目標にはいろいろあり、アウトプットは人数であり、アウトカムはそれにより何が生まれたかということを本来入れてはどうかというご指摘だと思う。今後の企画案の中で議論したい。

委　員：「ひまわりプロジェクト」は、協働コミュニティ課から委託ということだが、東京大学生態調和機構(通称 東大農場)に関連する市民グループとの役割はどうなっているのか。

事務局：「ひまわりプロジェクト」とは、あくまでもプロジェクトの名前であり本来は「ひまわり事業」のことである。ゆめこらぼが市から委託を受け、市が行っていた事務的なことや調整を行うこととなる。市民団体は基本的に従来からやっていたことと変わりない。市に代わって、ゆめこらぼが「ひまわりプロジェクト」に事業の遂行や運営を委託するかたちで動くこととなる。

委員長：ゆめこらぼはコーディネーションをするということですね。

委　員：東大農場と市民団体のプロジェクトとのコーディネイトをするのか。その予算もついているのか。

事務局：ひまわり事業運営のための予算がついている。

委　員：相談事業の対象者は、市民活動を始めようとする人を対象にしているのか、団体対象なのか。すでに活動している団体は、ゆめこらぼと共に活動することを要望していると思う。一般の人に呼び掛ける事業であれば、ゆめこらぼの発行物は一般の人には広く知れわたっていないと思う。このあたりの焦点がわからない。

事務局：相談事業は基本的な事業となる。団体向けと一般向けの両方を対象としている。現状では月10件程度で年間100件前後と相談が推移しているが、若干減ってきたように感じる。団体のゆめこらぼ認知度はある程度あると判断している。これから団体を作ってみようと考えてい

る一般の方に対しての認知度はまだ低いと思う。対象は両方であるが、認知度を上げる機会を増やすために、出前相談業務事業を行う。

委　員：両方やろうとすると焦点が定めづらい。もう少しそこをはっきりさせ、強く狙うところをはっきりしたほうがよいと思う。

委員長：相談事業は受け身の部分が多い。重点事業の広報・PR 事業も一般の人にももっと知ってもらおうという問題意識から生まれた。相談事業にかかわらず、一般市民にもう少しリーチがかけられないかということだと思う。

委　員：NPO 企画提案事業を行政から受ける件は、どうなったのか。

事務局：今年度以降、協働コミュニティ課と相談し、協議をしていくことになっている。

委　員：「つなげる」の対象に行政が入っていない。今年度、アースデイフェアは行政とうまく協働できず中止となり、アースデイフェアの市民団体側は自分たちでこの一年考えようということになっている。本来は、中間支援組織であるゆめこらぼが繋げる役割ではないか。

委　員：アースデイフェアを協働の観点から考えると、1 年目は良かった。2 年目からは団体と行政に少し溝ができ、3 年目は一線を引かれ、その次は苦労して実施し、今年度は一緒に開催しないことになった。その接点をどういうふうにしていくかは重要だ。市民の活動と行政をつなぐことができるのが、ゆめこらぼだと思う。市民団体だけでは行政に一線をひかれてしまうとそのまま途切れてしまう。その点、ゆめこらぼがその間を繋ぐことができれば、よい事例になると思う。

委　員：協働のまちづくりができるのは、中間的な支援組織だと思う。

事務局：市には約 100 の協働事例があると聞いている。その中でゆめこらぼが取り組むべき協働については、その方針にしたがって事務局としては努力したい。

委員長：行政との間に入ることは、ミッションとなると思う。

委　員：根本のことになるが、活動計画に示されている「つなげる」「あつまる」「ささえる」はなぜ問題提起されたのかを教えてほしい。それによって事業計画内容も考え、意見が言えると思う。

事務局：「つなげる」は、課題解決や新しいまちづくりをすすめる時に、一人では解決できないことを、繋がることによって解決していこうという趣旨だと考えている。その前提には「あつまる」ということがあり、ゆめこらぼがまちづくりの拠点になりうるという目標のもとに人が集まってくると考えている。2 年前に行った登録団体の調査から、メンバーが集まらないという課題があった。「ささえる」というのは、団体は、組織面、資金面、人材面で脆弱な面があるのでいろんな人の力を借りて支えたいと考えた。これは開設当時からの 3 つの目標である。

委　員：「ささえる」は理解できたが、「つなげる」と「あつまる」は少し解釈が広すぎると感じる。もう少し絞れると議論がしやすいと考える。

事務局：協働については、「つなげる」に絞ったほうがよいと提案したが、昨年度の運営委員会で議論され「つなげる」に重点を置くにしても、「あつまる」「ささえる」も残すこととなった。

委　員：事業の量は、事務局にとって適切な量なのか。

事務局：自転車操業的にこなしているのが現状で、もっと丁寧にやらなければいけないことが多々あると感じている。
委　員：今後、事業を削ることはできるのか。
事務局：事業計画にある事業は、どれも削れないのが実情だ。最低６つの事業は行わなければならないので単純には削れない。したがって、理念にあった形で３つの柱に沿って事業を関連づけていき、重なり合いをつくることで減らしていく方向で検討した。
委員長：受託時に提案している事業計画であるため、事業はこの事業計画に沿って運営をすることになる。
委　員：お父さんお帰りなさいパーティ（以下、おとぱ）も避難所運営ゲーム（以下、HUG）も、当初は市内の市民団体が活動していたと認識している。言い方は後方支援だが、市民団体から奪い取った形ではないのか。市民団体に任せればよいのではないか。
事務局：指摘があればそういう観点で見直してもいいと思う。登録団体の実態調査から、団体の課題として広報と活動メンバー募集の問題があったため、おとぱの活動をすることは団体の支援になると判断した。防災というテーマは市民の関心も高く、取り組むべきだと判断しHUGに取り組んだ。
委員長：広報の成果は確かにあったと思う。今後、運営委員が関わりを持つことでゆめこらぼの負担軽減ができればと思う。

2. 審　議　事　項

1. 前回の会議録について

委員長：文言など、明らかな訂正があれば発言してほしい。
委　員：会議録について言いたいことがある。自分の発言の記載について大幅に指摘したい。
委員長：従来は週末までに確認していただき確定稿としているが、事前に事務局には伝えていないようなので、今週末までに事務局に指摘してほしい。次回の運営委員会で指摘を反映した会議録を審議し、次回確定としたい。どこをどう変更したのかわかる形にしていただき、次回審議することとする。

２．副委員長の選出について

事務局：運営委員会設置規則第５条４項にもとづき２名以内で互選になる。従来、委員長が男性なのでジェンダーバランスを考慮し副委員長は女性にお願いしているため、田中（友）委員と田中（紀）委員に打診したところ、二人で受けるのであればという条件で内諾を得た。
委　員：お互いに補佐をしあいながらなら２人で受けるのであれば心強い。
委　員：副委員長の仕事内容と役割を確認したい。
委員長：通常、議事録素案を委員会開催前に確認をする。大きな相談事項があれば、事前に事務局と相談する。委員長不在の時の司会進行を代行する。
委員長：内諾を受けたお２人にお願いしてもよいとお考えの方は、拍手で承認してほしい。（委員より拍手あり）承認されたこととする。

3. 傍聴について

委員長：年度初めに傍聴の定員人数を決めたい。この会議室で開催することが多いので、傍聴人は定員3人にしたい。人事関係の議案では、会場から一時退場してもらうことで決定してよいか。

委　員：傍聴の定員人数を20人くらいに増やしたほうがよいと考える。

委員長：物理的なこともあるので、定員20人は多すぎると思う。

委　員：会場が許す限り、できるだけ多くの人に公開した方がよいと考える。

委員長：傍聴できることはホームページでも謳っている。かつては、狭い場所で開催することもあったため、定員3人を限度とした。

委　員：会場の定員から運営委員人数と事務局人数の差の人数にしてはどうか。

委員長：会場のキャパシティから決めるということか。毎回審議事項で、決めるのは大変なので、年度初めに決めたい。たくさん来ていただけることを願って、定員10人に決めたい。

委　員：運営委員会傍聴要領にある危険物についてお尋ねしたい。他市の議会で白い杖が危険物とされた事例があると聞いた。危険物に関する表記が曖昧なので確認したい。

委員長：社会福祉協議会の定義で決まっているものがあれば教えてほしい。

事務局：特に決まっていない。視覚障害の方の白い杖は危険物にあたらないと考える。常識の範囲内で判断しているが、明らかに危険なナイフなどを想定している。

委員長：限定列挙するとそれ以外はよいのかという恐れがあるので、あえて明記しないことが多い。危険物の判断は、委員長が「職務執行上支障がある」と判断をするということでよいか。

委員長：委員長が判断するということとする。

委　員：運営委員会で話し合われたことをSNSなどに載せてもよいか。

委員長：確定していることについては、SNSなどに載せてもよいのではないか。

委　員：傍聴者が委員会の様子をSNSで流すことについてはどうなのか。

委員長：会議録の確定前にSNSなどに載せることに関して、傍聴要領に記載するかどうかを議論したい。勤務先では、事前に注意事項を配布している。ツイッターなどの実況はしない。固有名詞などの非公開依頼があった場合は、会議録でも公表しない。傍聴を許すという前提ならば、常識の範囲内での判断に留めるしかないと考える。

4. 会議録について

事務局：会議録の方法として、大きく3種ある。全文記録で発言者が特定できる方法。要点筆記の方法。その中間で匿名による個人ごとの要点を記述する方法。この3種のいずれにするかを議論していただきたい。現状は、個人を特定できない形で一人ひとりの発言はわかるような方法をとっている。

委員長：過去に、出席委員をフルネームで公表したこともあったが、ウェブ上で公開するとインターネットの検索にひっかかることが危惧されたため中止した経緯がある。

委　員：会議録を残す目的を知りたい。

事務局：センター開設の提言書にも書かれているが、市民の方にセンターを開いていく目的に基づき公開をしている。ホームページで過去すべての議事録確定稿を公開している。

委　員：市民に見てほしいというのであれば、どういう議論があったかを可能な限り公開する姿勢が原則だと考える。運営委員はそれなりに責任のある立場だと思うので、誰が参加して誰がどう言ったかを明らかにすることは然るべきことだと考える。

委員長：逐語訳という意味なのか、発言者名が記名になればよいのか。

委　員：基本的には現在のスタイルでよいと思うが、発言をぼかす理由がわからない。文脈が読み取れないので、公開すべきものとしてきちんと記載されていない。そういうところがいくつもある。所属や名前が記載されていないため、運営委員会に参加している人には誰の発言かがわかるが、参加してない人はわからない。現在の体裁では、意味や経緯が分からないことが生まれるため、かなり不完全な印象がある。

委　員：誰の発言かがわからなくするというのも一つの方法だと考える。消極的だが、発言者が特定されることになれば、発言を控えるかもしれない。

委　員：個人としては、発言者が特定されることに対して異論はない。可能であれば、事前に会議録をチェックさせてもらい加筆修正できるならば問題ないと考える。発言者が特定される方が、読み易くよいと思う。

委　員：いろんな感じ方や意見があると思うが、今の体裁が適当だと思う。インターネット上で不特定多数の人が見る環境にあるので、悪意を持っている人もいないとも限らない状況も考えると発言者が特定できることは好ましくないと考える。

委　員：誰が発言したかを特定しないのであれば、テーマを決めて発言を要約し羅列した方がわかりやすいのではないか。会議録のスタイルをとるということは微妙なニュアンスを伝えるというメリットがあり、当然そこには誰が発言したかが関わってくる。会議録の目的が情報を市民に広く知らしめることならば、今の会議録のスタイルをとることに問題がないのか。

委　員：会議録を要約すると、公平に発言が記載さるかどうかが疑問である。発言すべてが記載される方がよいと思う。簡潔に要約しただけの記載になると、会議の２割程度しか記載されていないというようなことも考えられるので困る。

委員長：主な発言要旨と決定事項を載せるというやり方もある。

委　員：同じ繰り返しになるが、目的に対して何がかなっているかを考えるべきだと考える。市民に情報を届けるのが目的なら、市民にとって見やすいものを提供するべきだ。要約がよくないと言っているわけではなく、基本的には今の会議録はよいと思う。本来の目的に一番合致するものを考えた方がよいと考える。

委員長：今回個人を特定しないことで分かりにくさが顕著となった。要約であっても、議論の流れがわかるような形にし、文章自体をわかりやすくした会議録にする。発言者がわかってもよいようならば記名にするという折衷案はどうか。はっきり議論の流れがわかるように委員のみなさんにも協力をしてもらうこととする。今回はご自身の発言箇所に加筆修正をしていただき、発言以外の箇所に関してもわかり易くなるように手を入れていただければと思う。次回の運営委員会で、それをもとに確認を取りたい。

事務局：会議録のプロセスと結論がわかるようにするということか。同じような意見がある場合はまとめてよいのか。

委員長：同じ意見であっても意見をまとめるのは違うと考える。どちらかを削るのはあり得る。論旨が整っていない場合があると思うが、可能な限り、議論の流れは詳しく分かるようにしてほしい。

委　員：すべてを記載する形ではなく、主なポイントを記載するということか。

委員長：そうだ。ボリューム的には今の形と同じということだ。
協議事項を協議する時間が少なくなったので、協議事項で運営委員がなるべく企画に関わり提案していくことに関する説明をしていただき、広報戦略の検討に関しては次回運営委員会でしっかり議論したいと思う。

3. 協　議　事　項

1. 平成27年度年間協議事項について

事務局より、平成27年度運営委員会年間協議・審議事項（案）について説明があった。

事務局：事業企画案には、広報戦略の検討とNPO市民フェスティバル企画の2点の候補があげられる。広報戦略は上半期には結論、NPO市民フェスティバルは12月開催を予定しているため、5月意見交換、6月企画案提出、7月最終企画案審議、事前説明会の予定で考えている。

委員長：事務局から2点の提案があった。それ以外の事業は、企画段階の素案に対し意見を述べることとなる。これに対して意見はあるか。

委　員：市民フェスティバルの5月意見交換とあるが、誰を対象にしているのか。NPO市民フェスティバルに参加する団体から広く意見を聞く機会はあるのか。

委員長：運営委員会での意見交換である。

事務局：NPO市民フェスティバルは実行委員会形式で行っているため、実行委員に参加している団体からの意見は聞き実施することになっている。主に団体が実行委員会に参加していただくことによって、団体から意見を聞く形となっている。今年も6月以降に実行委員会を発足する予定である。

委員長：主な当日の企画などは実行委員会で決まるという前提がある。どこまで運営委員会で議論し提案したことが通るか難しい部分もある。

委　員：実行委員の経験から、事務局からの意見が素案となり、実行委員会で議論され、否定されることもあった。運営委員会で協議し出された提案が純粋に通るわけではないと考える。

委員長：事務局提案を運営委員会で煮詰めて、企画にもっていくという意見だが、あくまでも実行委員会で最終決定することが前提となる。

事務局：6年間フェスティバルを続けて開催してきて、今回は見直す時期ではないかという意見もあったので、俎上に挙げた。

委員長：運営委員会で斬新な案を考え、事務局案としてそれを実行委員会に懸けるということだ。

委　員：運営に関わらない者がここで話し合うことに、どの程度意味があるのかを確認したい。

事務局：個々で関わっていただいている運営委員も大勢いる。

委員長：当事者だけの意見だけではなく、関わっていない方だからこその新しい意見が言えると考える。

前提を踏まえた形だが、事務局から提案された主に2点の提案を運営委員会が企画から考えるということで進めていきたいが意見はあるか。ご意見がないようなので、広報戦略の検討とフェスティバルに関して、運営委員会がコミットメントの度合いを高めて企画から関わり進めることとする。

4. そ の 他

1. 次回運営委員会日程について

日時：平成27年5月19日（火）19時～21時

会場：イングビル3階　第1、2会議室